

農園を訪ねて<その8>

都心ビルの屋上菜園 - Edible Kayabaen -

2024年4月に東京都中央区茅場町のオフィス街にある東京証券取引会館のビルの屋上に開設された Edible KAYABAEN(以下、カヤバエン)を訪れた。カヤバエンは、一般社団法人エディブルスクールヤードジャパン(以下、ESYJ)とユニバーサル園芸社、平和不動産の共創によって2022年5月に開園した。ESYJは、米国カリフォルニア州バークレーでアリス・ウォータース氏が20年以上にわたり推進してきた「エディブルスクールヤード」の日本での承認窓口として設立され、「子供たちの生きる力を育むこと」「ほんものの地域コミュニティの形成」「自分らしさや分かち合いを促す場づくり」を目的とし学校農園の活動をしている。一方、平和不動産はこの地域の再活性化に取り組んでおり、その一環としてビル街に残るオープンな空間である屋上を利用した屋上菜園を企画していた。このアイディアに、ユニバーサル園芸社が街の子どもの未来というコンセプトを付加し、ESYJを巻き込み、キッズ菜園の構想が具体化したという。

カヤバエンの菜園面積は約600m²で広々とした空間である。年間150種類以上の園芸作物などを栽培しており、キュウリやブルーベリー、トウモロコシ、インゲン、ルッコラ、ダイコン、サトウキビなど多様な作物が育てられている。都心の気温は周辺の地域に比べ数度暖かく、夏は酷暑の対策として植え付けのタイミングを工夫するなど試行錯誤を重ねているが、冬には地上より高い気温を利用し、パッションフルーツ、トウガラシなど、通常東京では越冬しない果樹や野菜を越冬させている例もある。また、鳥が砂浴びをするために訪れるなど、菜園が都市の生態系に良い影響をもたらしている。パーマカルチャーを基盤とした有機栽培を実践し、ミツバチの飼育や雨水を利用した池の設置、ビルの地上階にある喫茶店から出るコーヒー粕、各階のオフィスのシュレッダーごみをコンポストに混ぜるなどの取り組みも積極的に行っている。一方、栽培に苦労している作物も

ある。特にブルーベリーについては、屋上という立地の特性から積載荷重の制限があり、土の量が少ないため水分管理が難しく、乾燥しやすい。また、他の果樹との混植のためpH調整も課題がある。それでもパーマカルチャーの考え方に基づき、コーヒー粕を撒くなどの工夫を重ねながら栽培に取り組まれている。

キッズ菜園としての中核的活動は、近隣にある中央区立坂本小学校の児童に対して、自然に触れる学習を行っていることである。ビル街で学ぶ生徒にとって、カヤバエンは心安らぐ空間のようで、小学2年生を対象とした「食べられる授業」に参加している。ある児童は、カヤバエンに来ると「ここは天国だ」といって喜んでいたという。ビル内や近隣のビルに事務所を構えるパートナー企業の菜園も設けられており、栽培や収穫を体験したり、社員が昼休みにランチを楽しんだりできるという。オフィスビルの屋上に位置しているため、誰もが自由に出入りできる空間ではないものの、週末には対面やオンラインでイベントを開催し、一般の参加者がカヤバエンに触れる機会も作り、多様なコミュニティ活動を展開している。

カヤバエンの取り組みは、単なるビルの屋上緑化にとどまらず、都市型農園としてコミュニティ活性化を促し、新しい価値を生み出している。不動産価値向上の効果も示している。日本国内でも都市部を中心に屋上菜園が広がりを見せており、2024年5月行われた「Edible Tokyo rally」でも都市型農業の先行事例として紹介され注目を集めている。これら都市の屋上という制約を活かす視点や活動は、我々の国内外での取り組みにも参考となり、今後に活かしていきたいと感じた。



ビル郡に囲まれた屋上菜園の様子